

出
巡
雜
記

出港

澁川驍

出 港

発行 一九八二年六月三〇日 初版

著 者 澁川 駱

発行人 山崎武雄

発行所 青桐書房

一六六東京都杉並区成田東五―一二―一六

電〇三三三九三―三七七三

発売元 星雲社

一〇一東京都千代田区神田錦町三一六

電〇三三二九四―五八一八

印刷所 精興社

定 価 二四〇〇円

© Gyo Shibukawa 1982 Printed in Japan

ISBN4-7952-8001-0

出 港

基隆の埠頭にはこの土地特有の細雨がきょうも相変わらず降っている。わめきたてるような銅羅の音にせきたてられて、父たちは濡れたタラップを気をつけながら下りていった。みんなこうもり傘をさしてこちらを見上げている。汽船に残された幹雄と修はよく下が見えないので、少し前に踏み出した。頭を雨に濡らすとマラリヤにかかると教えられて、幹雄はいつもそれを怖がっていたが、いまはそんなことをかまってはいらなかった。いつものように父は髭をピンと生やした厳めしい元気のよい顔をしていたが、母の死後だといぶ苦労したらしく頬がこけて骨ばって見えた。

そのうしろに背の高い親類の小母さんが立っている。家の手伝いに内地から来ている人だった。めったに口をきかないおとなしい女で、まだ二三日しかいっしょにいなかった。父と並んで河村夫婦。父が母の遺骨を持って国に帰っていた一月ほどの間、幹雄と修はこの家にあずけられていた。とくにこの河村の小母さんは腎臓でも持病であるような腫れっぽい顔をしていたが、親切なやさしい人だったので、他人の家の人のようにには思われなかった。河村の小母さんの腕にしがみつき、その袖に隠れて片頬をゆがめて眩しそうな表情をしているのは、その養女の歌子だった。尋常四年だったが、割合にませていて、一月いっしょに暮しているうちに、幹雄に思慕の情をおりおり見せることもあった。

出港の汽笛の音がして、汽船は動き出した。これらの親しい人たちから別れて、見ず知らずの人たちのなかへはいっていくのかと思うと、心細さが急に強く身をつつんできた。河村の小母さんがしきりにハンカチを振っている。父が帽子を取って高く差し上げている。悲しみが胸にせまってきたが、こんなことで泣いてはならないと幹雄は自分にいい聞かした。他人のなかでもっともつらいことがやってくるに違いないのだ。その門出から弱い気持であっ

ではならないと思った。雨のなかに父たちの姿がだんだん滲んでばやけていった。もうどこに居るのかもわからなくなってしまう。船艙の入口に身を避けているが、雨のしぶきが意地悪く降りかかってくる。それでもすぐには船室にもどる気がしなかった。へさきに奇怪な竜の絵を描いたジャンクがしきりに横を通りすぎてゆく。笹の葉のようなサンパンが盛んに港のなかを往來している。やがてクルーベ浜が薄墨色に遠ざかってゆく。この浜には父に連れられて海水浴に來たことがあるのだ。少年時代の懐しい記憶がこの島とともに海の向うへ消え去ってゆくような気がする。雨脚が急に強くなってきた。まだ心残りがするようだったが、途中で病氣でもしてはと心配になって、幹雄は修の手を取って三等船室へ下りていった。

かなり沖に出だしたところから汽船がだんだん揺れだしてきた。船室特有のベンキの匂いがいやに胸にこたえてくる。弟も黙って顔をしかめている。もう船に酔いだしたにちがいない。幹雄は弟に横になってるようにすすめ、自分も毛布にくるまった。船の揺れは少しも弱くはならなかった。やがて船室に夕食が運ばれてきた。胸がむかつくので、幹雄は今夜はたべないことにした。弟にどうするかときいてみたが、やはりたべたくないという。夜に入るにしたがって船の揺れがますます強くなってきた。修がたまりかねて、

昼間たべたものを吐き出した。ひどく苦しかったのと、それに兄と二人の旅に不安を覚えたらしく、その後で声をあげて泣きだした。幹雄はそれをなだめて、弟の背中をさすってやったが、自分もその臭氣に釣りこまれて、またつづいてボーイの置いていった金だらいに胃のものをもどしてしまった。そのころにはあたり近所でも同じいやな声があちらこちらに聞えた。

夜明け近くになると、汽船の荒れ方はいっそうもの凄なものになってきた。甲板にぶっつける波の音が頭に氣持悪く響いてくる。その間に引き裂くような風の唸り声が聞える。船室にある食器類が転げる音がする。汽船が暴風雨のなかを進行していることがよくわかった。だれの顔にも不安な表情が出ていた。横になっていて座席をじっと目で計っている二、三メーター上ってゆく。と思うとまた奈落の底に落ちてゆくようにグッと下ってゆく。それに抵抗して転ぶまいとすればするほど、胸もとの氣持悪さはいよいよ強くなっていく。もうそれは船が揺れているというような生やさしいものではなかった。幹雄と修は二人とも夜中胃液のようなものを無理に吐きつづけた。修は恐怖にいたたまれないらしく夜中声を出して泣きつづけた。八歳の心にはこの初旅の経験はあまりにも大きな打撃だったのだらう。幹雄もその心を思いやると、自分もまた声をしのば

して泣きたいような気がする。しかしそんなことがあって
もいまは泣いてはならないと思った。もしそういう表情を
弟に見せたら、弟はいよいよ絶望的な恐怖に襲われ、どう
いう醜態を人前に示さないともかぎらないのだ。それでな
くとも幹雄はこれからの苦難は十分覚悟の上だから、どん
なことに出会っても泣くまい、歯をくいしばって生き抜こ
うと決心していたのだから。

しかしこの暴風雨のなかには、うっかりすると難
破しないとも限らないような気がする。近所でもそういう
噂をしながら乗客が心配している。もしそんなことがあつ
て、まだ十一歳の若さであっけなく死んでしまったら？
この想像は堪えられないほど怖ろしかった。幹雄はこの危
難から自分たちを守ってくれるように、口のなかで思わず
「お母さん」とかすかに呼んで、祈った。いま彼には神の
ように思われるものは母以外には感じられなかったのだ。
と同時に母のグタリとなった死体があざやかに浮んでくる。
ネルの寝まきから喰み出た肉づきのよい手足の白さがいま
も目に見えるようである。どうして母は自ら縊れて死んで
いったのだらう。産後の肥立が悪くて、神経を痛めていた
ようだったが、それだけでそういう思いつめたことをしな
ければならぬだろうか。ちょうど父が新しく赴任した炭
坑の逆境を持ち直そうとして、ひどく苦しんでいたが、そ

の心労だけで自分までがそう絶望しなければならぬのだ
らうか。ほかには家庭ではそれらしい原因はなにも見つか
らなかったように思う。それなのに母は五人の子供を残し
てどうして死んでゆく気になったのだらう。彼にはどうし
ても母の本当の気持がわからなかった。

次の日も次の日も海は荒れつづけた。幹雄たちは一度も
食事の箸を取る気になれなかった。ボーイもあとでは食事
のことを聞きにくるだけで、わざわざ運んでこようとはし
なかった。それでもなにも食べないでは衰弱して死んでし
まいそんな気がする。船に乗りがけに父が荷物のなかに
突き込んでくれたビスケットを寝ながら少しずつまみ
だして、それをむりやりに口のなかへ押しこんだ。到着す
べき三日目が空しく過ぎて、四日目となったが、まだ船は
危険区域から脱したようには思われない。あるいは方角の
わからない海上に漂流しているのではないだろうか。かえ
って不安は増大してくるばかりだった。やっと五日目にな
って船の揺れが少しずつ静まってくるようだった。夜がす
っかり明けきったころ、意外に船が平静になってきた。人
の話ではそれはいま五島列島のあたりを通り過ぎているか
らだということだった。やっとこれで命だけは助かったの
だ。やはり母が自分たちの祈りに答えて、見えないところ
からしっかりと見守ってくれたのだらう。幹雄にはそんなふ

うに思われた。

昼過ぎになって船がようやく門司港外に着いたということだった。検疫を受けるために甲板にみな出てくれということだった。幹雄も自身体がフラフラしながら、起き上がのがいやだという修をなだめすかして、手をひいて階段をのぼっていった。船艙の入口から味ったことのない酸っぱい寒気が肌を突きさすように襲ってきた。やはり内地の風は想像以上につめたいものだと思わず立ちすくんでしまった。しかし甲板に出るとなおいっそう驚いてしまった。まっ白なものがしきりに海の上に降りしきっている。たしかに雪にちがいないのだ。台湾では一度も見たことのない雪にちがいないのだ。幹雄はその美しさに嘆賞の声をあげたいほどだった。船の上のところどころにもそれが斑らにもつっている。舷側から下を眺めると、まっ青な海面にその白いものがスッと吸い取られて消えてしまうのだ。いま停船しているの、雪はまっ直線に落ちていくように思われ、その広い眼界がきれいな白線の縞のように印象されるのだった。乗客はみな二列に整列させられた。まだ吐気があるような気がしたので、もしそれを人前に見られてはと思つて、幹雄はうしろのほうの壁に寄りかかつて立っていた。やがて金筋の入った帽子と服を着た検疫官がこちらのほうへ近づいてきた。その一人が幹雄に向かって、前に出てこいと

いうしぐさをした。それで幹雄は自分の顔色になにか悪い病気の徴候でも出ているのかとビクッとしたが、それは大人のうちろに隠れていてはよくわからないというつもりだった。

いったん幹雄たちは船室にかえって、船の港内にはいるのを待った。やがて汽笛の音がして、着船したことがわかると、乗客は皆残らず荷物をまとめて我を争って甲板に上っていった。幹雄は基隆のように岸壁に船が横づけになっているものかと思っていたが、まだ相変らず海のなかに横たわっていた。それでも今度は前と違ってあまり遠くないところに陸地が見え、人家が小さく重なり合っているのが眺められた。いよいよ内地へ来たのだという感じがいまハッキリしてきた。二三艘のランチが白波を蹴立てて近づいてくる。このランチで自分たちはみな埠頭へ運ばれていくのだろう。従兄にあたる甚一が迎えに出ていく話だったが、果して埠頭へ来ていくだろうか。もし船の延着で行き違いになったら、この先はいたいどうしていったらよいだろう。今度はまた違った不安が強く頭をもたげてきた。最初のランチが汽船のそばによってきた。そのランチにも五六人の人が乗っている。そのなかの一人がしきりにこちらを向いて手を振っている。何気なくその人を見ていると、どこかで見たことのあるような顔だった。た

しかに甚さんの顔だった。来るとき写真帳を出して父から教えられた顔だった。甚一はすぐランチから舷梯に飛び移って、駆け上ってきた。従兄とはいえ、十四五も年が違うので、幹雄にはむしろ叔父の感じだった。その人が人中を掻き分けて荷物の世話をしてくれるので、幹雄はもう自分一人で気をもんだりする心配がなくなつて、やっと心が安らかになった。甚一にうながされて、幹雄たちは舷梯を下りていった。ランチが波にゆられて上ったり下ったりする。危いので幹雄は途中で立ち止まった。するとランチからこちらを見上げている老婆があった。その人と思わず視線が会ったとき、まだ見たこともないのに、一度でそれが自分の祖母であることがわかった。

「よくたった二人で来られたな。」祖母はランチに乗り移った幹雄たちの姿を見て、眼に涙を浮べた。

まさか祖母がこんなところに迎えに来ていたとは少しも予想していなかったのだ。幹雄は非常に意外だった。この祖母は四五五年の間気が狂っていたことがある。そしてやっと二三年前によくならつたのだ。それでも病気の間いろいろ乱暴をしてみんなを困らせた話を聞いているだけに、幹雄は祖母がひどく怖い人のように思われてならなかった。彼はランチで埠頭に運ばれて行く間、それとなく祖母の様子に気をくばつた。少し眉毛のあがつたいくらかきつい顔だ

つたが、それ以外には別に挙措表情など常人と変つたところは少しもなかった。それで幹雄はやっと安心した。

雪で汚れた町を人力車に乗って甚一の家につながれてゆかれた。人家が段々になつて重なり合つたような狭苦しい所だった。甚一は門司の鉄道局に勤めていた。そんな関係で汽船会社の人とも知り合いが多いので、それを利用して沖まで幹雄たちを迎えにすることができたのだ。寒いだろうというので、部屋には炬燵が用意してあつた。それに幹雄たちは手足を突き入れた。友禪の布団の匂いが、火氣といつしよに胸もとにムツと押しよせてくる。台湾では見たこともないので、幹雄はそれがなにか内地の匂いでもあるような感じがし、思つたほど内地も悪いところではないような感じがした。いつの間にか天氣がよくならしく、ときどき雲間から日光がバツと明るく射してきて、窓ガラスに映つた。長い間の疲れもあるためか、なんだかうとうとしかたくなるような気持だった。そこへ表の戸が開いて、買い物に出ていた甚一の妻の安江が帰つて来た。ひととおりみんなの挨拶が終わると、安江はネンネコに負つていた赤ん坊を膝の上に抱き下した。いままで眠っていたらしい赤ん坊はその拍子に目をさまして、急に泣き出した。甚一が気をきかして長火鉢の猫板に置いてあつた牛乳瓶をもつてきて、赤ん坊の口先へ突き出した。しかし赤ん坊はそれを受

け付けようとはせず、ただ顔をそむけて泣きつづけるばかりだった。この赤ん坊は芳正という幹雄の一番末の弟なのだ。母に置き去りにされた芳正は行く場所がなくなつて、一月ほど前父が帰国したときいっしょに内地に連れかえられて、甚一夫婦のもとにあずけられたのだ。この夫婦には子供ができないので、父はゆくゆくここへこの子をやつてもいいというつもりだったのだろう。母が死んだ直後、乳を欲しがって火のつくように泣いていたときの芳正の姿が悲しく思い出される。いまなお人工栄養ではどうしたつて満足な思いをすることはできないだろう。なにかこの子には初めから不運がつきまといっているような気がする。この子を眺めることは、離散した自分一家のつらい境遇を見せつけられるようで、胸が痛かった。それで幹雄はなるだけそのほうを見ないように努めた。

2

祖母に連れられて、その翌日幹雄たちは筑豊炭田の中心地飯塚で汽車を下りた。その郊外にある忠隈炭坑に伯父夫婦が住んでいた。そこへ幹雄たちは当分厄介になることになつていたので。伯父は伊集院常忠といつて、この炭坑の会計課長をやつていた。背が高く、血色がよく、鼻が高

いので、一見西洋人のような感じのする人だった。片方の眼を失明して、義眼を入れていたので、藪睨みみたいな目付になるときがあり、それがちよつと顔を怖くすることがあった。会計をやる人だけあつて、なかなか几帳面な、親切な人だった。しかし非常な潔癖で、その点ではなかなかやかましかつた。食事の前にはいちいち幹雄たちは手を洗わせられた。いままでそんなよい習慣を持っていなかったのだ、幹雄はそういう煩わしいことにいちいち神経を使うのがひどく窮屈に思われてしかたがなかった。それでなくとも伯父は義理にあたる人だったので、この人の前では、いつも特別に緊張していなければならないような感じがした。

伯母は死んだ母の一番上の姉にあたつていた。おりんという伝法がかった名を持っていたが、まるでその名とは反対の感じだった。眉毛の黒い、眼尻のよく切れた顎の細い鼻筋のよく通つた美しい人だった。しかも容姿ばかりでなく、その心ばえもいかにも女らしい優しい人であつた。といつて趣味まで旧式に古臭いわけではなく、むしろ身の回りの好みは町家出であるにかかわらず、都会的に上品だった。背は低かつたが、鼻が高く、そのわきに少し目に立つホクロのあるぐあいだが、やはり伯父と同様に西洋人の感じがどこことなく匂つてるように思われた。伯父の影響を受けた

ためか、伯母自身もきれい好きだったが、伯父ほど病的ではなかった。むしろ自分の性ではないが、自然にそういう習慣になったところがあった。それで伯父がなにか不潔なことを見つけて、いらいらしながら怒っているときでも、その場ではおとなしく黙って聞いているが、それほど伯父のことを気にとめるふうでなく、すぐ忘れてしまうようだった。またほとんど人を疑うようなことのない人だから、この人の前では幹雄たちも気を許して話ができるような感じがしていた。

祖母の竹は伯母の母、従って幹雄の母の母にあたっていた。伯母のおだやかな性質にくらべると、祖母のほうはよほど神経質のところがあり、なんとなく冷たいところがあった。これは一度気が狂ってから、そのときの陰鬱な気持が習性となって残ったのかもしれない。容貌なども隠居さんらしい上品な顔でありながら、頬骨が高く、白眼がちなどころに淋しい頑なところがにじんでいた。自分の娘のうちでありながら、のんびりできず、非常に遠慮深く、いたいこともいえないといったところがあった。それは伯父の潔癖からくるやかましさを、伯母のようにになげなく聞き流すことができないところから来ているようだった。もちろん自分がこの家の厄介者であるという考えがもとになっ

ているが、その上に自分が病氣のときに、この伯父に

非常な迷惑をかけているという意識も手伝っているようだった。祖母と幹雄たちの寝室は玄関わきの四畳半だった。風呂を終わってこの部屋へ引き込むときに祖母にとって一日中で一番のびのびしたくつろぐことのできる時間らしかった。

「南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。」祖母は床に入るときにこう呟くのが癖だったが、そのことばの調子には、いかにもやっと一日の安息ができたという感慨が含まれているように思われた。

幹雄はいくらか親しみができたとはいえ、この祖母と床をならべて寝るのは、なんとなく薄気味が悪いような気がした。それと同時に、母のことについてなにか聞かれはしないかということも不安になった。初めの日は茶の間での話が長くなったので、寝る時間が遅くなり、四畳半の部屋へ引きさがっても、互いに話を交える余裕もなく、とにかく助かった思いがした。しかし次の日は時刻も早かったので、幹雄はすぐ寝つかれそうになかった。祖母もまた闇のなかでなにか考えごとをしている様子だった。外ではしきりに犬が凍てついた空に向って長く遠吠えをしている。それがなんだかまだ異郷という感じで幹雄の頭に響いてくる。「幹雄さん。まだ起きとるな。」突然祖母が声をかけた。「え。」思わず彼も返事をした。しかしそのあとですぐ黙

って眠っているふりをしていればよかったと思った。

「おっ母さんはどうして死んだとなく。」

「どうして……」

「ほんとに病気で死んだっちゃうのか。」

「ええ。」幹雄は父から実際のことはこの伯父と父方の人にはつまりらぬ親類の取沙汰になって、口うるさく噂されることだから、一切黙っているようにといわれていた。ことにこの母方の祖母は、以前の病気が病気だけなおさら知らぬ顔をしていなければならぬのだ。いつかはこのことに触れられるのではないかと覚悟はしていたが、やはりその場になると、ひどくまごついてしまった。しかし幸いなことに闇のなかなので、自分の狼狽した表情を祖母に見つけられることはまぬかれることができた。

「心臓麻痺で急に死んだという話じゃが、どうもそんな気がせんのだな。」

「お医者様がたしかにそういつてるんですから。僕たちもそばにいてよく知ってるんだけれど……」しかし実際幹雄は母の死の現場を見たわけではない。彼が見たのは母の息を吹きかえそうとして、父や近所の人たちが薪の火で体を暖めているときだった。メラメラ燃えていた赤い焰がいま闇のなかにはつきり浮び上ってくる。悲しみが急に胸に突き

上げてきた。なんだかことばまで震えてきそうだったが、もしこの不注意な態度から、祖母に不審を抱かせたら、いままでの苦労はなんにもならなくなってしまうのだ。彼は闇のなかにバツと目を開いて、その幻を追ひ払おうとした。しかしまだチラチラ赤い焰の淡い陰が部屋中を飛び散るようだった。

「そうかね。」祖母はまだ少しも彼のことは信じないような口ぶりだった。いやあるいはすでに本当の死に方を漠然と感じているのかもしれない。彼女は部屋に響くような長い溜め息をついた。しかしそれ以上彼に向って問いつめようとはしなかった。幹雄もまたあいまいななりでもそれが無理に通っていけば、それに越したことはないと言っとホッとした気持になった。

この伯父夫婦には二人の男の子があった。上の常政は幹雄と同じ年だったが、学校は一年下だった。伯父に似た面長の整った顔立ちで、色白で背も高かった。しかし小さいころから弱い子で、その名残りのルイレキが首のわきにくつもできていた。そのせいか常政は伯父夫婦からいくらか甘やかされているところがあつた。しかし幹雄に向つては、我ままなところは少しも見せず、むしろ幹雄を兄のように思つて、その意見になるだけ従おうという素直さを見せていた。またその下の修と同年の常文は、兄よりは

くらかきかぬ氣らしかったが、性質が明るく、別に意地悪なところを見せるふうではなかった。ここへ来て幹雄がひどく珍しく思ったことは、この従弟たちが自分たちのやったことのない遊びを非常にたくさん知っていることだった。竹馬も初めてだった。紙鳶も初めて見た。コマをまわすこと、金輪を走らせること、メンコを打つこと、そんなことも幹雄はまだ一度もやったことがなかった。彼のいままで住んでいたところは基隆から八キロほど山奥にはいったところにあった。この炭坑には内地人は二十人たらずしかいなかった。遊び友達になるような子供は一人もいなかった。その他の数百人のものはみな本島人だった。そのため幹雄たちはいつも兄弟同士で遊ぶよりほかに知らなかった。したがってそういう遊びを一切教わる機会がなかったのだ。従弟たちはいままで幹雄たちがこんな普通の遊びを知らないのをふしぎがりがら、得意そうに手ほどきしてくれた。がこのことは幹雄になにか強い圧迫を与えた。というのは伯父一家の生活がいままで自分の家の生活よりも非常に生活程度が高いということだった。これはこんな遊びだけにかぎらなかった。食い物などについて最も強く現れていた。幹雄は小さい時からおやつなどというものはあまり知らないで過して来た。それなのに従弟たちはいつものなにか懐に菓子突きこんでいて、それをムシムシやたべてい

るのだ。山奥の関係もあってか、幹雄たちは牛肉などはめったに口にすることがなかった。それなのにこの家では毎日のように牛肉の出ない日はないのだ。

この家に来た翌日、幹雄たちは常政兄弟に連れられて、父方の祖母のところへ帰郷の挨拶にいった。この祖母は小さな雑貨店を坑夫納屋の並んだ間に営んでいた。従弟たちのことばから、この店が一般に婆さん店といわれていることがわかった。社員住宅の区画と坑夫納屋の区画とはハッキリ別れている。それで祖母の家の近所に来ると、なにか違った部落へはいってゆくような氣おくれがした。それに幹雄は祖母の家はもっと店らしい恰好をしたところだと想像していた。ところが実際に見る祖母の家は黒くすすけて、今にもつぶれてしまいそうな店だったので、なんだか意外な感じがした。祖母の名はトラといって、すでにそのとき八十五歳の高齢であった。下ぶくれの蕪のような恰好をした顔全体がひどく皺だらけだった。その皺の間に若い時やったらしい疱瘡のあとを点々と見つけることができた。こんなに皺が多いのは、五十前後まで関取のようによく太った女だったので、年を取るとともに痩せてそうなっていたのだという。年を取っているので、子供たちが自分のうちに来てくれといっても、祖母はそんなことはいっこう相手にしなかった。自分は生きて働けるうちは子供たちの世

話には一切ならない。細々とも自分の力でやってゆくと
いつてきかないという話だった。

この店を祖母といっしょにやっているのは孫娘にあたる
園江という女だった。孫娘というのが長男の子で、その長
男が早くなくなっているの、いまはこの家の子供みたい
になつてゐる。一度結婚したのだが、里帰りのとき誤つて汽
車から落ちて、片足を轢き切られてしまった。それきり婚
家先には帰らず、祖母といっしょに暮しているのだ。すで
にいまは三十四五になつてゐるが、ふっくらした肉づきの
よい顔に若さが残つてゐた。それでもソバカスのある頬に
浮べる遠慮深い微笑には、不具者らしい淋しさが強くだ
よつてゐた。

祖母と園江は成長した幹雄と修の姿を見て、非常に喜ん
でくれた。それにきょうは伊集院の子供が二人ともついて
きているので、園江は店先にある唐豆、南京豆、肉桂水な
どを所狭いように並べてしきりに彼らを取りもつてくれる
のだ。幹雄はここにあげてある小さい弟と妹の姿が見え
ないので、それとなく気にしていると、園江がどこか近所
へ呼びにゆくような様子だった。間もなく表から守光と君
子とが慌ただしく駆けこんできた。守光はいま七つで君子
は四つだった。この二人は父が母の遺骨をもつて国に帰る
とき、門司にあずけてある芳正といっしょに内地に連れか

えられたのだ。それからわずか一月ほどしかたつていない。
それなのに二人はこの近所の坑夫の子と同様に青い鼻をな
がし、顔全体薄黒くすけ、着物もひどく塵あかによごれ
て光つてゐるのだ。まるで間違えるようにみすばらしくな
つてゐた。幹雄はこのとき、親に別れた子供の悲哀をまぎ
まぎと見せつけられたような気がした。と同時に同じ兄弟
でありながら、自分たちだけが伯父の家で贅沢な生活をし
てゐることを責められるようなつらさを覚えた。また一方
いかにも坊ちゃんらしいきれいな恰好をしている従弟たち
が、このことから自分たち一家を軽蔑しはしないかとい
うことが、非常に気にかかった。この虚栄心は根深く強い
ものだった。伯父の家で感ずる生活的な圧迫を平氣な顔をし
てすましてゐたのに、こんな思いがけない不意打の出来事
から危く自分の狼狽を従弟たちに見透かされはしないかと
怖れたのだ。彼はその落ちつきのない気持から祖母がもつ
とゆっくり遊んでゆけというのに、ろくろく弟たちとも話
をせず、皆を促して表に出ていこうとした。それは従弟た
ちがいくぶん手持無沙汰にしているのを気にしたせいでも
あったが。

「兄さん。もう帰るの。」守光が鼻の低い顔に不満そうな
上目ごしの視線を見せていった。

「うん。またすぐ来るよ。」

「そう。」気のりのしない声だったので、それがグッと幹雄の胸にこたえた。

「それよりもすぐ兄さんといっしょの家に住むんだよ。」

彼は弟を慰めるつもりでこういった。事実飯塚の町に父が小さな家を作ってくれつつあったのだ。それができたら、母方の祖母と守光を合せてそこへ四人で住むことになっていたので。

「お父さんは？」

「お父さんは台湾でとても忙しいんだよ。」

「修さんはいっしょ？」

「そうよ。」

「ふん。」守光は初めて明るい顔になり、修と顔を見合して、クスリといたずらっぽく笑いを浮べた。

それでやっと救われたような気がして、幹雄たちは祖母たちに別れを告げて表の路地のほうへ出ていった。初めての土地なので、常政がこれからこの炭坑のほうほうを案内してやろうといっだした。それでその好意にしたがってあちらこちらを見て歩いた。いままで自分たちのいた台湾の炭坑にくらべると、まるでお話にならないようにその規模が大きかった。坑夫納屋があそこ丘、こちらの丘といったところにピッシリ並んでいる。一番納屋、二番納屋と管轄が違っているのだそうだが、どこまでがどちらの管轄か

わからないように互いに連続して大きな部落というより、一つの町を作っていた。赤煉瓦の煙突がその中核を作るように三本高くそびえている。そこから送られる蒸気が動脈のようにこの部落のなかを黒いパイプになって縦横に通っている。ところどころにそのパイプの傷んだところがあり、そこからそれが生き物であるという証拠のように白い蒸気が勢いよく噴き出していた。幹雄たちは社員倶楽部のある丘に上っていった。エンドロスという無限軌道で動くトロツコの列があちらこちらに見られる。すべての土地が石炭でまっ黒く汚れ、そこへ油の落ち散ったところだけが濁った褐色や青色に光っていた。ほうほうにある捲上場では齒車の鳴る音がしきりに聞え、トロツコの坑道を走る音や、地上の待避線へはいる音がときどき潮の音でもあるように急に聞えたり、聞えなくなったりするのだった。だいたいここで時間をつぶして彼らは事務所の前へ下りていった。そこを通りすぎて選炭工場のほうへいった。機械の噛み合う凄じい音がひっきりなしに聞えている。ちょっと覗くと、紺緋の着物に手甲をつけ、頬かむりをした女がしきりにコンベアの上の石炭を選び分けている。それからもっと先へゆくと、石炭の積込場が見える。トロツコの石炭引き込み線になっていて、貨車の上に直接達磨がえしの仕掛でザアと一べんに流れこんでいるのだ。一わたり見てしまったの

で、彼らはいま来た道を引きかえしていった。幹雄はかつて自分の父がこの炭坑で坑内主任をやっていたことを知っている。伯父はその当時の同僚の一人だったのだ。従弟たちもそれを聞いているにちがいない。そのことだけが自分のいま先き減入った氣持を引き立ててくれるような氣がした。いつの間にか夕暮になって西の空が赤く焼けている。もう交替の時間が来ているらしく、裸にちよっと上衣をかけた坑夫たちがツルハシをかついだり、握ったりしてやってくる。そのなかには女の坑夫もたくさん交っていた。彼らは短い紺の腰巻をして、なかには冬だというのに石炭粉のまっ黒くついた乳房をブラブラ見せながら通ってゆくものもあった。常文のほうは家から金輪を持ってきていたので、先ほどからときどき走らしていたが、帰り道になったので、急に元氣づいて一人先にそれを回して走りだした。シャン、シャン、シャン。金輪の金棒にふれる音が高く響く。そしてその長い影が納屋のトタン屋根の上に踊るように映ってゆくのだ。

3

間もなく年が変った。彼ら二人の兄弟は伯父の家にもうほとんど厄介になった。一月の終りごろに飯塚の家ができあが

ったので、彼らは祖母の竹といっしょにそちらに移っていた。婆さん店にいる守光もそれから二三日して、また彼らの家族の一員になった。この家は飯塚といっても、その町はずれにあたる孤田というところにあった。すぐ近くに穂波川が流れ、その高い土手がすぐ目の前に見えるところだった。伯母のおぎんの家が表の道に面しているところであり、彼の家はその伯母の家の裏手で、そのわき道から奥へはいってゆくようになっていた。この伯母は伊集院の伯母の妹、彼の母の姉で、三人姉妹のちょうどまん中にあって、二三年前に夫を病氣で失い、いまは三人の子供をかかえる寡婦だった。夫の死後別になんの蓄えもなく、さっそく路頭に迷う境遇だったので、伊集院の伯父が心配して、ここに家をたてて、そこへタバコやその他の雜貨を売るようにしてくれたのだ。幹雄の父が帰国したときに、おそらくこの伯母の家のうしろに土地が空いていることが話に出たにちがいない。それで父は男の子たちを次々に中学にやる必要上、急にここに家をたてて、子供たちを教育しようと思いついたのだらう。もし台湾にいたとしても、幹雄はこの年には父のもとを離れて、台北の中学へはいらなければならなかったのだから。それで父は台湾に帰ると同時に、足手まといの感じもあったので、すぐ幹雄と修を国に送りかえすことに決めたのだ。月々家賃まで送ってい